

アメリカの生活改善事業の特徴と農家生活

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	安川, 芳子
巻/号	42号
掲載ページ	p. 122-124
発行年月	1977年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



アメリカの生活改善事業の特徴と農家生活

安川 芳子

はじめに

昭和50年度生活改良普及員海外研修生4名のチームの一員として35日間、アメリカ合衆国のアイオワ州、ウィスコンシン州、ウェストバージニア州、ワシントンD・Cの4州を訪問し、各州立大学と農務省を中心に普及事業ならびに、農家生活の実際について研修を受けた。時間的制限と言葉の制約などもあり、十分な伝達はできないと思うが、与えられた条件の中で研修できた内容をまとめてみた。

1 アメリカ合衆国における普及事業（生活改善）の概要

(1) 普及事業のねらい

はじめは、アメリカに移住した開拓農家を指導することから発展し、制度化されたもので、以来、農業や農業者を対象として進められてきたが、今日では、農家はも

ちろんアメリカに住むすべての人々を対象とし、その生活に何らかの影響を与えている。

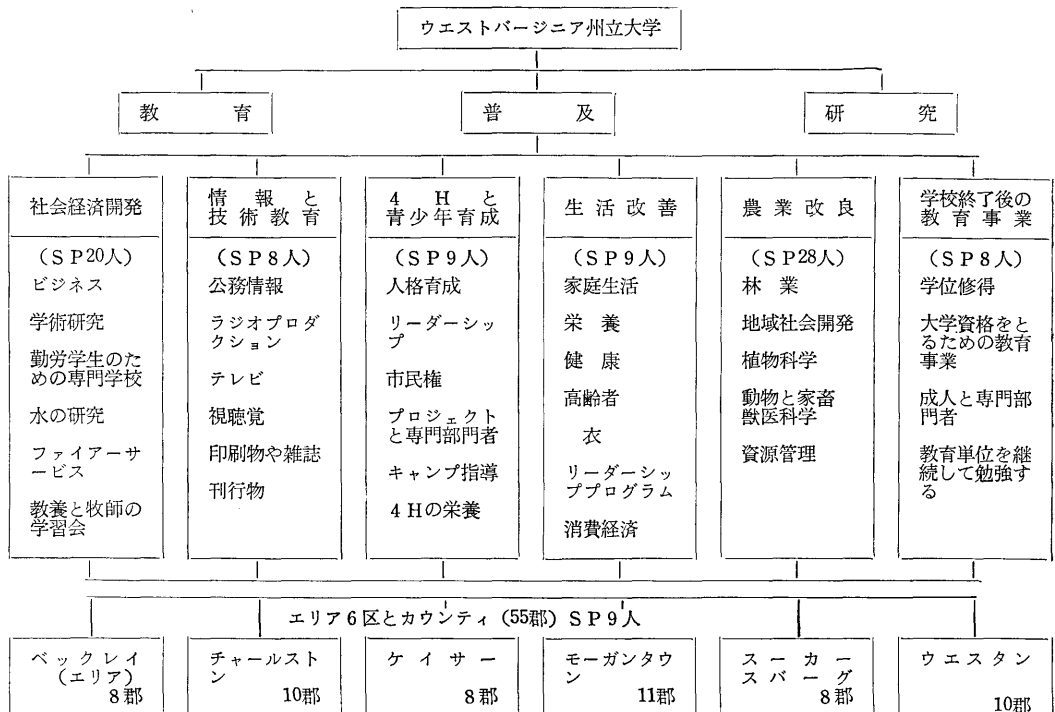
したがって、人種、性別、年齢、宗教、国民性などに関係なく、アメリカ中の人にサービスする普及事業になっている。

普及員は、農業担当、生活担当、4H担当とはっきり定められているが、普及事業は、地域の農業をはじめとする関連産業資源の開発、住民の生活改善、環境づくり、人づくり等幅広い責任と期待を担っている。

(2) 普及事業の特徴

① 教育、研究、普及の一体化

アメリカの普及事業で最も特徴とするところは、周知のとおり、教育、研究、普及の三位一体化の体制である。そして普及の本拠が州立大学におかれ、多くの責任が大学にまかされていることである。大学の運営は、運営委員会の協議によって行なわれ、大学総長の任命もこの委員会が行なう。州知事と言えども、この委員会には



権限の及ぶものでなく、大学は完全に行政から独立した存在であり、教育、研究、普及の3つの使命を果している。

このように公正な立場にある大学及び普及事業が運営されているということは、当然その事業の本質や性格、領域といったものを教育的に定めてくることになり、普及事業が教育であると言われることも容易に理解できるものではないかと思う。

大学農学部と試験場と普及部の3部門は組織として構成されているだけでなく、内容的にも機能的にもよく結びついて、すばらしい普及効果をもたらし、普及事業の威力を示している。上図はある州の普及組織である。

② 普及の委員会組織と運営

普及事業は、人々の意見により運営するものとされていることから、農民のリーダーによって、カウンティ毎に地区委員会が構成されカウンティのプログラムの管理や、普及員の受け入れについての協議、申請、予算確保、長期計画作成の役割をもっている。

③ ボランティア活動

アメリカはボランティア活動の盛んな国と言われていているが、普及事業においても欠くべからざる協力者になって、多くのボランティアが活動している。特に4H活動プログラムや、生活改善の分野では、「ボランティアがいなければ、とても仕事はできない」と普及員も言明している程、期待がかけられている。

したがって、普及員のボランティアに対するトレーニングも、大事な仕事の1つとなっている。社会奉仕活動をするのは、当然のことと考えているようで、自分の持っている力を人に与えることは、自分自身の生き甲斐や、自己形成の手段ともなっているように見受けられた。このボランティアの精神は、移民、開拓、自活、自衛、資源開発という連続から生まれた国民性ともいえるであろう。

④ 低所得者層の生活改善

生活改善分野の仕事で特徴的なのは、低所得者対象のEFNEP(栄養教育事業)のプログラムである。これは、食生活改善を手段として生活の向上を計ろうとする仕事で、エイド(栄養指導者)を雇って指導に当らせ、普及員はエイドの指導、監督と、必要なテキストの作成を担当している。特に所得の低い対象にはフードスタンプが与えられ、栄養価の高いものを安く購入できる制度も採用されている。低所得者層は、生活力が弱い上に、勤労意欲が低く、困難な仕事と言われている。

⑤ マスコミ利用の普及活動

普及活動はマスコミ利用が盛んである。新聞、ラジオ、テレビを使って指導するプログラムの年間計画が、

州の普及部で作られ、積極的な活動がなされている。特に、ホームメーカークラブ(生改クラブ)や4Hクラブ等や、勉強できない人達、又は直接普及指導を受けられない人達は、マスコミを通して、普及のサービスを受けている。多くの手段方法で多くの人に普及指導することをねらっている。

2 アメリカの家庭生活

(1) 農家生活の実態

私たちが主として農家生活にふれることができたのは、アメリカの中部盆地で、アメリカにおける第1の酪農地帯である。農家の経営状況を見るとウィスコンシン州のマーヴィン宅の場合、畑1,000エーカー(400ヘクタール)に、コーン・大豆・小麦を栽培しており、肉牛は夏250頭、冬500頭、羊120頭、鶏400羽を飼っている。農作業は機械化しているの、私たちが接した範囲では主婦は、鶏を担当するとか、特に忙しい時に手伝う程度で、農業労働には位置づけられていなかった。

(2) 学びたい主婦の社交性

良い印象を受けた1つは、人との接し方が非常に上手なことである。町角ですれ違う私たち旅人にも親しみのある挨拶がなげなく送られてくる。また主婦は社交性に富んでいて人を家庭に招待してもてなすのが上手である。

(3) 上手な家庭運営

① 計画的な日常生活

日常生活に1週間のサイクルがあり、共かせぎの主婦は、1週間のうち、1日はパートの人に掃除をまかせ、週末を家庭と共に楽しむよう心がけている。

余暇時間は、社会に遅れないように勉強することと、奉仕活動にあてている。

② きびしい子どものしつけ

あまりしめつけた教育をしなくて、のびのびと育てているようであるが、一面、きびしさも感じられた。子どもたちは、家事や農業の一部を責任をもって担っていたし、それは言いつけられてするのではなく、4H活動や日常生活の中で自然に身につけた自主性のようであった。

③ 豊かさの中で物を大切にすること

農家の地下室には、農場で収穫したトマト、きゅうり、いんげん豆などのピクルスや、果物のジュースなどを所せましと並べてある。冷凍庫内にもホームフリージングされた野菜が貯蔵されていた。親ゆずりの食器とか、家具など、古い物を大切にしている家も多く、不用品の交換会には、服・家具・食器・本にいたるまで、数多く出品がみられた。最近資源の豊かなアメリカでも、物を

大切にとか、くらしを考えるとということが強く叫べられるようになったとのことである。

④ 機能的な住まいと緑豊かな生活環境

アメリカ農務省の住宅指導項目の中に「風雨をしのぐだけの家ではだめだ。社会環境のよい所で、快適な家に住むと、人の心に自分の家及びその住む地域社会に対する愛着が芽生えてくる」とあるように、実際どここの家庭でも全館冷暖房設備が整い、リビングルームには、鉢植の観葉植物や、飾り物がおかれ、安らぎを感じさせる。汚れやすい設備を1カ所にまとめて、衛生的にし、快適に過せる場所になっている。「住む家次第で、人の自己イメージは変わってくる」といわれているが実感をおぼえる。宅地も緑豊かな芝生に囲まれてなだらかな丘陵に、多くの牛が青草をたべている緑豊かな風景は印象深いものがある。

(4) 積極的に参加するグループやサークル活動

アイオワ州を除いては、地域に密着した生活改善クラブ活動をしており、郡単位ぐらいで、研究課題をもって取りくんでいた。技術の交換会や、「カバードディッシュランチ」といわれる持ち寄り昼食会、各種のミーティングの見学ができた。勤労者のための昼食時利用の勉強

会では、サンドウィッチなどの昼食をとりながら指導を受けるプログラムである。日曜日の教会は、生活の主要な部分を占めており、心のよりどころとしているようである。宗教的つながりのサークル活動も盛んである。

3 研修結果から提言したいこと

35日間の研修で、普及事業や家庭生活の一部を知ったに過ぎないが、私なりの考えで、私達の日常の指導活動に必要なと思われる5項目をあげ、研修結果の報告にかえたい。

- 1 幅広い対象への働きかけと、柔軟な指導力の必要性
- 2 情報資料の作成と伝達方法の工夫（マスコミ利用の指導）
- 3 普及と試験研究機関との連携強化
- 4 効率ある指導活動に必要な器材の導入（エジュケーションテレフォンネットワークによる関係機関との情報交換）
- 5 ボランティア活動への誘導

（香川県農業改良課）

アメリカの農家生活を見て

千葉はつ

私は、一昨年9月1日から、約1ヶ月間農林省と県の共催による「生活改良普及員海外研修」に、秋田県の越後静さん、香川県の安川芳子さん、和歌山県の玉井満喜子さん等3人の仲間と一緒に参加した。

アイオワ州、ウィスコンシン州、ウエストバージニア州、ワシントンD・Cの4ヶ所をまわり、各州立大学普及部、および、農林省普及部を拠点にして、生活改善の立場から、アメリカの普及事業についての研修をした。

ワシントンを除く3つの州では、農村の婦人組織を訪問したり、土、日曜には農家に宿泊し、短時間ではあったが、実際の農家生活にも触れることができた。

言葉の制約などから、十分な理解は得られなかったが、見たこと、感じたことの一部を記してみたい。

訪問したところは、乳牛、肉牛、豚等の畜産が中心で、バター、チーズの生産も多い地帯である。広大なとうもろこし畑、その彼方に点在する農家、そそり立つとてもいいような大型サイロ、何十頭、何百頭の牛の群、

大型農機具の数、すべての農家がそうだとは思わないが、アメリカ農業を見せつけられた感じであった。

ちょうど、とうもろこしの収穫期であり、刈取りからサイロ詰めまで大型機械による一貫作業で、みるみるうちに処理されていくのを見て、規模の差を知らされた。

農家の婦人の多くは家事を担当しているようであったが、中には、大型機械を運転して牧草刈りを手伝ったり、養鶏を分担して、卵を毎日、店まで届けているという人もいた。

家族は、子供が結婚すれば別居し、後継ぎについては、子供の自由まかせているとのことである。

ウィスコンシン州のマーヴィン家の息子は、結婚後すぐ親から農地の一部を買い受け、肉牛を夏は250頭、冬は500頭、綿羊130頭、鶏400羽、それに、1,000エーカーの畑に、とうもろこし、大豆、小麦等を栽培し、親と共同経営の形をとっている。

両親は、年老いて働けなくなるまでは息子夫婦と一緒に